難問辨
呵刈葭

ホ 2
914

上田秋成論

難問辯　一名呵刈葭

全

914

あん

上田秋成論

難問辨

一名呵刈葭

全

ホ加2 914

上田秋成論　難問辨

秋 云、、

秋成の初度の雜文ハ写しとゞめたるをこゝにあらはすこと
なかりしが次々の條も全文をハのせずたゞいさゝかづゝ出せるの也
見ん人そのこゝろして見るべし

宣 田安中納言殿の御問荅原美樹の荅といふ物ハたゞに他人の
偽作ならざるか疑ハしきところ多しとおもへ

秋 彼度問荅ハ往年美樹子に遇し時借り得へらましを写取し
となる御問の題ハ魚彦が古言梯の後編に美樹のいへるをとりし
云ことをあらはしその事ことに渉せしを記さしむ他人の偽作に
あらじ美樹かくいひけるにても御名紙花をへりしが秋成文

師名を偽りし然は問答共浅学にて而為之との説旨
なる事くはしくいふにたらぬことなりけりみるべきなり

宣 古の世はきよきに偽りなしといへるはさることにて後世に偽りなき事を
いにしへ偽りなしといはざる説を聞しに然共其樹主の心ならひ
うけふに偽りて宥せむとするきは偽りなければ今はいふべきことなし

右第一條

秋 古の人の云誤にぞんの事なりといふは秋の甚しき誤り神風を
加牟加是と読べしと教へむに云云

宣 私の甚しきとは何事ぞや古の仮説にもとづける理もなきことを
己がおもふままに定めていはむこそ私ならめ古言にぞんの事なるを
しかるはゆゑある説理共有く既に本書にいへるが如し然るを便

すくなきによる後世の謬例になづみて古もなかくのなくなりむ
と思ふは甚しき誤なり古へ今をもしらで古への説を立ることをするは
何ぞさる事をいふのさきにあきらかにする人の言のごとく今と見て
説をせば唯一(ユイヒトツ)と今は多くさ一ッといへど古書よりいひさしつとせる
なるも今を説として古人とても又謬には多くさいひさしつといひつ
めども此する言の仮字略りし所に略きて多くはいひさしつといひ
など いひよむときは多くさいひてよむをよしとぞいふや
又ゆうむかくしむの類を今はゆこかつるといふもも古書にゆう
むうつむとありとも今を説として皆ゆこうつるといふ仮字に
よむべきや何をも言をとらむかは今とてもうつといひつ又ゆん
さるれとよむ所ぞひそそれを謬る所に多くさいひさしつゆこ。

かくろの轉をいやしき言と誤りおもふはあしきやさきさん此例と心
て循て今一経音に行ふのあやまりて見よ中古の音便かつてんも
文書に訛よて本の正しき語をば便りむかつてむといひしことを
さとるべし猶ことし書にむかひては加牟加毛とあむとも
書とたら訛てはかん風かこ風とあらしてはいひたしかむ
とは唱へならはしつるべしと思ふは後世の訛にて訓しつるがたへにて
まろうきをも久しく訓じつるよしは穏に思りき訓ぬこともいふなる
も穏ならしに思りるを掘りたるとや行きが後世人のかんぞもどく
よむと上古の人の呼しつるむかし返て甚呼ぐるしく思ふべし
今とても人の名の三郎なとどいさむらうと唱ふきともさら
に呼ぐるしられさんらうと唱へつるむは返て呼ぐるしかるべし

是等く訓つるを訓ざりしものもちぢめをたるべし又万葉集にゆむと
ゆうもせむ将為とせもなどいひつる古例をいに今云ふ如き弁
よりも呼ぐるしきをおもしれや行ひとこそはれど今もんとい
よめど字のまゝにもとよむはおもしはやさるきがむし字のまゝよむ
とよむにはかならむ文書とよる書をも古言をばみなむし
唱へむに行はるゝむは唱へぐるしく思ふは訓さるが故へ但し古言に
ても右の如きのむは後世のごとく古へもんと唱へし證拠あるやうき
はし説例をおきことを己りんのごとくいはずくるを私の甚しきも
[秋] 音句を主とする西の書にはとしんと呼ぶに一定の字あきは
んは音よりしに句おきが三絡きは御書の草に出る言よいんの音
有べきにおしれどいでもに御書のも上よりの連声に濁りて自

然よんの音なりとも其に従るべき字を假りてはむ年尓毛等
の音の方常なる故用ひて其唱法には活用して味あはせしむる
むきは記すほとしに見り多し
【宣】西の字においてもんは音になりしば句となることも句頭に發する字
の音は雖然もいつれも單直なる故に句とはいふなれはしてくは別の
韻をさて連声に結ひて自然にんの音なるは中古以来音便に
くづしたる訛言なれども本の正しき言にはあらしば自然の音に古今
の異なるは今の人にんの音なれども古の人とてもんの音もあつし
あたされは不正の音なるが故に古へは言語には用ゐることはなかりしなり
自然にある音をいれつまる音をはやへかの清濁の音にらきしも
今の人にある音なれは古への人にもあるしてとおもへし然さども甚

不正の音なる故にこれは中古までも言語にはをさをさ用ひざりて
しかるに後やこれを上に准へてんの音とも言ふべし自然さる所を
言語に用ゐると用ひさるとのけぢめあること以て
古への言語にも用ひし説とせはつまる音をもふへかの清濁の音を
ども古への言にもあるべきにあらずして一つも然きはいかに

右才二條

【秋】上古にんの声ありといふ方も説まづ漢字にんの句なることを
吏も元来言の字なりしとも字を假りて書くる方和歌集に許多
あなり見點告兼行覧別南乱今可聞意也久良三ちまらの字
漢字んの句なる下の所の也と一字あるに一定の字なれば原に
武年無等等の音は假ても活用にはまゝり・の連声にて自然の

唇音に通ひむたんた呼べき事それを弁ずるにはむすびの唱へきなり
唇口の始用文字のうへに活動するにてそれぞれ
宣 古はせのてんせんらんるんの類とももてむもむらむすむと
むだきさゝりて呼しとぞさき小點兼覧南留のんの句の字とせらい
んともむに近き声なるに傳りたる類の例は集中にあり
紀書にも多きが中に地名の神なみを甘南(カミナミ)とせるなどに入り
んの句の字とせるとはなくびんと呼し説とせい神なることをも古へ
はかんるんと呼びとせんといふ又地名の多爾(タニ)波を丹波(タニハ)とせるがごとき
名称その古事は太迩(タニ)波とこそ訓むなんといへることはいひなん
へきられにしてもんの句の字は近き声に傳りたる物なることを知
べし さきたんの多爾だもそ中古以来よしさんだと呼ぶ見物んと

皆音便に頼(リカツ)きたる訛なるにて後知るべし猶此類いと多し古書を
むしきみてみつくし知らるべし 又唇口の始用文字のうへに活動せる
ことあるをもといへるも今の世副ひなまなづみて古への正しきを忘れ
ざるものゝ為にいかにも委く辨ふべし

右第三條

秋 三郎をさむらうとよぶは字音のうへながら此國の音便の連
声にて郎をんと互に通はせて唱ふべき説の且字はむ仮
名俗曲之類また悉く斯く唱ふ所なるも如し唐玄宗を楊妃
の李三郎と云ふ事ありしと儒士はさんらうと読てさむ
らうといふまた又俗の呼名に源三郎といふをもげんざぶらう
と唱へてきんさむらうと呼ぶ人どもし淫曲家の三老女をさん

らうぢよと唱ふるも皆自然の連声也昔の金ぬ車もおむこやらん。
とは唱ふべし然むみやうがむは連声せし奥が春菴もあむと呼む
は連声なるべし然むむむは古声調ふべかりし也
【五】こまちは返く此方より従例にかなふべき事なれども語文字出せる
は笑ふべきことなん語も今一度よく思ひくんつかばみづから愧る宗匠も
べしいつわしいふに此語は神風の神をかむと呼ぶは唱へらるしと
語じうるを余が返答に従ひふら今ぷんとのゝ唱へ訓する故へ凡て聖
ることとは唱へらく分らじ訓さることは唱へらるしく分らるしく文なる
とりふさて例ば三郎をさぶらうとむさぶらうと呼べたさうみ唱へくらるしかくなる
かつらば文を文従唱へるれさる故といふしるれば同じ三字をかの
李三郎三光女なとの時はさん夷三郎朝比奈三郎なとの時はさむ源三

郎平三郎などの時はさぶと唱ふ是皆唱へるまゝ也なれかる故かいづれも唱へ
ぐるしうらば呼ぐるしかし然らねばや世の中にさぶと呼はさむと呼む
ようは呼ぐるしかるべき語なるよそも呼ぐるしかるべく訓する
故にかくのやくなる語にもまては返て古方より従ひ出るべきる故
されど上古は神風なとの神をかむと唱へらむも今まで唱へなる時
るまでは何か唱へぐるしく呼ぐるし語本何しむ今の世にてもこゝろぐるしく
一城年がおなじ假字のまゝに加年加是と唱へなりしひとく試みに浚みとら
返るかんと唱るが呼ぐるしかるべきでことは余みづから試て思ひ定まる
ことを何るにまても神をかんと唱へたく三郎をさんろうさむろうさぶろうとも唱へ
あまたるはいふも自然の音便にしてかのつらし唱へるはされく浴物之
凡て音を訛言とよ訛るも皆自然のまゝにて後訛る事べき理なし。

おのづから訛れる詞アリといへども自然の理なきにしもそを顯はし訛りたるを
正しと心得たるは大なるひがことゝ知るべし今の世に大事ぞといふてむ
ぎやうかいといひを経句といふことゝぞ思ひなしといふ説に当りしもの
訛を顯はすべき自然の音声の理ありておのづからかくいふてこれ
など正しき唱へといひつゝいふべき又南無阿弥陀佛を唱ふる事多く
なんまみだ仏と唱へ又なむあみだ仏とてよく唱ふる事はいなまいだと唱ふ
これらも自然にて此の今の訛音の流れにしてなんまみだなまいだ
然も自然の連声よりぐ正しきものにや神風をかんぜと唱ふる類も
阿弥陀をなんまみだと唱ふる類と心得べし然るになんまみは今としても正し
く唱ふるはなむあみだといひてこそ本意をもあるに今をなんまみ
訛といふ説も知るを神風は堪かむ風と正しく唱ふる人なきもあるを

風と正しそれは然れば神もころといふ詞を中古以来は神ん
ころといひなかみさを漢籍読にはなんさとよむよりしかの神風の
のんを正しとせずしてまでも神んころなんどと正しくして神も
ころすみざい唱へぐるしく連声せぬとていふんか韻き无むぷなど
いぷんと唱ふるも汚いざる故に神もころと書るをば仮字のおくに神も
ころとよみ然みざとがれみざとよむよりしぞや知るにでもむにの
み唱へぐるしうこそ仮字にもむきぐんぷんと正しとはべきいとをれなしれ
てむみぷもぬぷかなどいづきも中古以来音便にてつきぐんぷんとよぶ読
然るをば皆なの神もころのねかくんとよぶは本條にはたす
韻きこゆる音ゆゑに中にてむぷとのことなりんぷんと唱へしと
いふもみぷもぬぷかぷの例により然いへども此條の心とりて成るべく思ひてむ。

然んと唱ふるも同じく疵音ありて二ともいひ分くべからずして其雜たるは音律にあらざる。
唱へやすきは自然の連声和諧の声と一つ揃はるる事也大よそ五ヶ一つにととも
ふかば音便のなるしきに少り寄せて自然と顧きし阿弥にて阿事といふ事ぞ
そもそも正しとはせん但し悉曇家よ音便不音便といふ事も立て音便
のなるしきわかちを成て呼びしとわけ雜志に見れと見えつるわれや和事只
語にいはることともかしめども皇帝の古云よいはる例なし禍もある
二音便なりとく禍んなるよふ唱ふべからずきも一音便なるなどもあらしとせば
深音りんを除かよむ平音なるいと平へと唱ふる方正しきわや

右同條

【秋】曳云自然の音あるも金石絲竹革木羽毛の音は人の音に阿し禍が
不正音はしとすべし淳土の人も音声をきに似られいこられ又正しかりきとや

糸竹不正の音あらじ人の云便に合奏すべからば革木いかく神を和らん
事ん上古は云便を糸竹の音勺に合せて声を調へ咏ぜさせしに阿らずや
彼蹈とぞろこれ霞槽れ音も喨楽の声に叶ひてたらして奏りんよい大御神
いいよく深く思ふりしせさすべし人と申し音勺和諧せむ哭のうてき
出るしいちの始よいふぞれるまでとの出来べき又風と級戸神の風息といふを
大呼ましませば於々の句のをも音を引は不正といふや又物に觸すれはきも
物の音も和して萬物とある音の許哀呂しくとも正しかしぬ音あり
始先て我出は成出るりといへどいかで糸竹革木の音神とも人なとも
和みまつれるを一民の已が私なる忌を以て不正之といふ凡人伝せん
やも海外の出ての人の言便羽毛を鳥獣をといふも又私の悪しき者也
かの右社左社を叟が論せしもく萬物皆音のさきらを御出のことをも

なるが故て正しとはいふらむかはいとこゝろ得がたき事なり。
いかにも其れ好きがため正といふは唯一人の耳ばかりにこそ有れいはゞ其の
耳にも自然に有る声音をば何の論なきことにて我尊し他卑しの
説にて道き非也魂の人口にもなし昔の人にも此は栗なりの言過ち
有りと論とや
【宣】これは余がいへるごとく成いふんにて非じとなるとて大概の事わり余はいでり
萬物の声を不正也といふらむ人も多くの萬物の声は通さとても不正といふ
其れ作人は人見る萬物は萬物の音ありて其正不正も各異に従ふとも人は
しる萬物の音にもとき是これは正に何しもや萬物は人の氣に通ふらむも
又正しとせんにも琴を弾てんかも声人の音に似たらんは誰が也と正音と
いふらむもかゝる不正なるのあらはしをも妖怪也又人の物いふ声琴の音に似たらん

もこ世に月に紀せは人の音はいさゝかにても萬物の声に通さば不正也と
知るべし　さて又絲竹正不の音なりとも人の云耳に合奏して和せしや
といふは音律の訳をしらざる論也凡て物の和するといふは異なる物も
合して一ツとなるをいふ人の音と糸の音と竹の音とみな各の
異なる物なるが合して一ツとなるを和といふ也その和を論じて和せ
ざる故といふは音の正不正にはあらずいつることにあらねば人の音も糸竹金石
の音も律合へば皆和をなし正不正は和せむといへば各物の音は和せざる
ことなるべし糸の音の正しき竹にしても不正竹の音の正は糸に
不正なれどもえまで音の正不正と律の和不和とは別事なるべきを
つかへてふに混じて又音律けど不正といかやといへるも余がいへることとを
がへて論ずるは皆おなじといふ物なると余はいでて正きを不正といへるも

余がいへるは外国人の声はゆるやかなる緩く呼てはなりて能く呼へば必末の
つまる声となるてあるや弱し此ゆるやかに呼べば必ずしく引声になりて
正しく此急く呼ば阿の声を呼ば能く呼へば必ズアッとつまる声に音を
ゆるやかに呼べば必ずアとも引声になりてアと正しく呼ナトなりて正しくは
放ては不正とは外人のいふところのことわるも存在正しくみだりに
に雜声は一方の人の言語をしていふも余がことに取しても外国の
音も皆雜声も其漢国の入声の類是也　さて余が皇国の言語より皆
單に正しく外国に異なるを正声といへるにつきて雜声は漢国
五社の例をのべて万国に異なるをみて不正といへるにもいふにあらず一偏之
凡て事はすべて物にきて万国と同じきが正しく異なるが不正なりとも何を
又異なるをが正如とも同じきが不正なりともおも一偏ん亦と定むべからざるは

人情はもとより言もまた異国人國は例へども中外の別はもとより陽道にだには
かも物のやうに言のことわりく正しきもの也よしやは此方は正しく此の正
しく他国を不正とせむもやことは我は我に異あるを萬国にしも正しきや
異なるが正しきは和皇国の声音のやうなきもの正しきは今雑声の音として
植ゑる如くいはれて我は我にては我だに外の国よりもかしこき皇統の
天壌無窮に伝はる至て永く君臣の分の厳明なるは萬国に異なるが正し
きわりなくあやりに外に異なりと皆に正といへども皆正とすれば
我国をしも此卑しといはむや異なるといへどもそいはせしより
人倫をも思ひいふは卑しき漢国をば我国より尊びていはれぬ
来る皇国は文の如く君臣をも父子の如く夫婦の如く
之然ればいふ君父をも尊しとして漢国の諸卑しくもあなかち今雑声

かゝる論ずる所ハ世の生まれつきの由縁よりしてかくのごとく成たるものとしるべし
音に濁して去る人のことをも論ずるとも是ハいはれなき事にあらず
さもしいはるまじくぞや

秋 右第五條

半濁又不正音之事とやもしんの声を清く字につきてむく
いふも是にして清ひとらんば半濁又おきても固く清ふべしされ
言語を知出るにも連声なくては調ハず然るに半濁といふも清
濁との中間にありて実に和語の声といふべき音之阿波なども安和と唱
へるもあハ何を下同として波をわとも書きなつべきぞといはれ
たるさらなれど於表（表）いふ音分別なくて二字を用ふとしさてハ於と
表ハ唱ふる口すらも[illegible]耳のもさつやうに多ぶく波の半濁とわとハ何となく哈

まさ学者もなほ是をつきや偏見我強くいふもとよりこれは正しからぬ言の
あり来たるの音を成ぞといふべきなり一方帯しくる音韻なくんば上古の人
いかく唱へなし正なりといふべし此曳の於表の別なりといふも叶へるにあらざ
らんや 文

豈 まづ半濁とハぱぴぷぺぽを濁音と呼こてとくに唇を弾くとすれども
清音に呼ぶ音なることを之音韻にいへるがごとし然るにいまし連声の便にて
去るなどし是不正音之濁して連声なきざるをや唐に皇国の古言より
發声ハ清しにもいまだ連声の位といへども音一つもなしるからんや余が
半濁音といふも此音のある之響にて華はりにぱぴぷぺぽを連声の
便なくてぱぴぷぺぽとのごとく呼ぶとも半濁といひて今難しのいふところ
の半濁も是之然ども是ハ半濁といふべきものなり

いたづ音便にはしまるはぬふゑをとゞもほどこて半濁音といふべし。
抑またはぬふゑなどは十行の中の一行なれば清音にして濁といふべき
いちれなりし然乱を中國にてハ是皆半濁に唱へてはちふものなく始く
音便の方を先ん案も組ひしてはたまへりはまた貿出にかくハ此音を半
濁といひしなりて古より余がいふ半濁ハ甚不正の音にて只はぬふゑを
のごとく呼ハ音ハ不正にはしざまたるびぷぺぽなと音便にてはぬふゑとの
ごとく呼ハ古今の正しき音にはしざる之総て今雅言ハ只二種を混じ
て余が半濁といへるを只音便のはぬふゑとべ係りくんれ之ハ違へり
於表とハ四声も耳にも分ちたるに波の半濁と和とを併せて知らざり
しやといへるハ雅言の連声のは行の音ハ是と同しく上古にも正は行の
音のごとく呼しを後國くんれ唐なる気韻にして行ひて上古には阿

波をおぱと唱るがごとき連用の音便とはしふになりしてあくとも音の
端にかたを唱へたれハ何も別る半濁の音といふ物何しても（こては半濁といふは始く雅言の称とる）
ここうふ従ひていふへ実ハ是ハ半濁といふへきものあるかる事にて字辨にもすかこときし君も人何事もなりたる月に既に半濁の唱へなれハ
ほと分る分らざるの論とすきてん於と表と別はしハ此部にはして
於表の別ハ假字二ツ行てれて知べし波行の音と和行の音にはつてハ波の如く
別る甚假字非なき中古以来の訛なることはしりし上古にも今のごとく唱
へしもまた阿波なとハ古くし阿波（和）と書べきをここ多くいひ此半濁ハ和といふ
りの実ハ行りた波よそハ近きにその音和とたとしく書き波と書べきよしいへん
やハもって上古よハ半濁の音あつてしことこと何とも縦すと上古の音ハこれ
いふを今は世の謂ってたると準らしく国語にいふのことおぱとぱとハ海也
いこま音混して分かつてき、はどのいさきつの差あるにそれまで假字二ツに古今

けるを能く考へあり此清濁をあしむるに心を用ひて分つべきに制に此清濁の差
別をなして字音ハ決してこれあるべしと能く心得べし

右第六條

秋
魚の名に鱏と蝦ハ共に衣比と云ひ東木に櫟子覆盆子ハ共に伊知比と云
清濁の差別なくハ分ちかたし是れ文字の名を借りて
呼ぶハ其の用をなす事と行はざるべし 又淡路を阿波治阿和延と
波則[?]を波衣堤を多牙絶を多衣の語ハ語ふに用ひしかるべからぬかく
書記しハ其の用にハ何に事物の分別しあふ皆分かちしかるべし加
何書契束してハ是を採るやしつゝやくに得志の利便を羨みてこれら
の法則をも設けしりの後彼土にハ後々の人文字を合せて事物を
作りしむることを例を莫字に日を合せて日没とそしせ馬を

合せて言駒とそしたるあまた見えたり是も日莫塗遠と言をあはせたるく
すくなからぬハ只一字にて書しさんと思ふが後人の意見を得問の言語を好く
これをハ知りたるを古きなく思ひもと云ハ此語ハ万葉集の東人が
詠みしと云句ハ通ふしもこれ一ツの意を得たハ可なるべしに阿母志々と云ひく
父母なりしとハ当時の言人もつかべりしは波流波母と云てハ春哉とや字ま
かへん針哉といふとハ思ひすじりのとそれも一ツの言を続くいふ物ま字
さらしるに行しすやりし此理等の知るらぬも成が浅学以て推究めに
且他人を教示せまれハ誤ちも又しやすきこと之叟が梓行のまとろき
業ハ徐に械立ちあらきつき術も知りるべし

宣
清濁の分ハ上古よりありて假字とも書分られハ鱏と蝦といふもまた
知し又櫟ハいちひ覆盆子ハいちびなれハ何のまぎれこともあらん此二ッを

こゝに出せる例ハ雅言の兼忽之されど語をふハ行つゝしても化の物にかへても同
しことなきハ卒竟雅言のことハ清濁半濁の分ちなくしても合てしまふ也
其大なるハ其が一ときまづ清濁ハ假字の異ひ分かれハ謂なし波行の其波
の半濁ハ上古にかへれるものしこともあ條にいへるが一とし其て其半濁ハ上下しと
いひたる行の用をなさるに行のまかくこともいひしむも其言のさいハ上下に改
にまりく分るハこと雅言みつもしもいつるに行に混やすし此半濁其ちい
言の差別なかりしんといへども箸橋端るどハ行にて分んとする但しこれらい
にも声の上り下りともて分べけれども神髪紙などハ声の上て下りすで
全く同じくしていさゝかも差なければ混することなかりしとや然るに清濁
行の法をハ行ぽとも出なざと事物を分むとあるを云いもも可笑くこそ
然ハ川と皮直と村などハ行にて書分けさするぞやよしやこれらも皆川を

かぢ皮ハかぢ直いまぜと枕いまがとやうにもちいゐてもせよそいふ波行和行の
音の言のこの一ときまハ行の音をも記きいふつゝことえ明事物を分むことなし
書分けをなさしハ此行をもて同音を言ハ十行の音ことごとくちらはハ行をえらば
十行の音ことごとくくらいふとくハ天(ア行)雲(ヤ行)蛛霜(サ行)下立絶(タ行)額(ナ行)糠(カ行)萩脛松待守漏圓
止我輪(ワ行)かやの既同音の云皆出ぬ行の音のいまし

大方七條

秋 連が假字の論定に婆ハ全く濁とはいへり然るに婆を半濁に用ひしことも
ありしは古る記の歌に阿理加用婆勢 迦祁婆那久 牟那美流登伎
婆 日本紀にも 倶婆絶継鳴 耶你婆階(至)武岐底 万葉集にも 君之當婆(アタリハ)
氏里豆多氏流婆これら婆をもつて濁音ては行とも記き言之ことを上古にて
濁の声なかりし証とて仮字ハ清濁とも全濁又ハ半濁とも唱へ又全濁をもいふ

しかるに清て唱へるのを猥りに假字の清濁混雑せるを古書に探り出して假名
遣ひへりしは実が私なる耳にきき半濁も朦朧の声に紛るるや或は私なる耳
には清濁の中間にきこゆ和諧の声としても字に無き所全書に依て眼は千歳
を経て古き耳は其に従ふてもまちまちに依て説をたて文字を
とりくの正しく成るものにかかはるや在やとしたる字のとかく清く
自然の声を不正としるしいふもの何程悉曇家にしてぴようむとのほかなる
ぺんの自ずから然不正といふべからざる由を同じく云ふに言霊のうへの事口舌に係る
云ふべし疑文語に定むるを私に定め語るといふは返て漢土魂の字母弁じ
かはりきりのぞ音声の妙しきは悉曇家に迂なるは取りして漢土文字の
の音を読んでも悪くあらば当らへりし語を悪しみに取りて自然にすべからず
往古の声にぺんの形あきらかにしも字音きはに定めてさるべし武家も是の方弁せる

皆假名に記し来れるをいかんゆゑならむのかく中世に頻りに造りたるし其ぺんの
形を以て自然の声の技巧せる語有の母音を転じてもこれが字を設け
て造れるにあらしや平仮名にもにぺんとを文字し片仮名には二とンとを文字
しつる其に学説を立てて由るを知らせる梵のは是らを変体といふ
それにやあらむひるも此事なども皆の上古音をかくに定しく後よりも造り
たるして皆がしきにありしに縦に補足してまたも利あるを害ありとす一際
にあつむべきし此ありは云語は声に定め凡例とこそ語本をば古に合
せて考へむるの仮字例のことに拘泥して他人を暗者に致すべきこそ

宣 まづ古事記の書式の中に清濁混世和のごとく唱へて半濁を称する音都
て百卒に無かりしを平同百四十なれども皆清音の字を書きて濁音は
婆字は其らはまづ古に十字ありしていふべきこと千記の内にて古七は他本にはなし紀

なく残さずハ七ツ八ツニ余る写本を三四本校合せる事大かたなし然れば今ニ四本にも
剞劂本を校合せバ多くの七ツ八ツも彼に徴まる本あるべく清濁ハ後の誤写なるべき所
も有し彼ら濁音ハ互につゞきに誤書ある事もいかにも多し互にひとしき写誤は
あらざる事もせよ百七十語中の中にてつゞくに七八ある方を執べし必ず清当
し況てよりもと除百四十あまりの彼をとる事とはあらでいえんりす清
といふ事なりしく其仮字をさ合ッ本どもなくば百七十語余りは悉く清音を正すべき
ことぞその人記中に朱椅を姿ゝ加へ有るこれは連声なればぱぴと
濁べき所にはあらぬとや又通をを杼富礼と去る所なとらなくは清音なり
よむべき所なしと決しく濁るべき所にあらば又左に彼らに加て決しく
其濁とも心べき所にあらされば写誤能り写誤なるらす八杼富礼
と同様の二変に候まいりぬ事をしに清音の事ま濁成せるも皆氏例そ

写誤にあらずば変之なる変といふは日本紀万葉にも非なき所なきは無し
されば清濁の仮字を書合せる中に或は清音の所を濁音の字を用ゐたるも亦
然りとて清濁分れたりといふべからず然しては未だ書分たる事なれ
遺へるがあるは変之すてその変なる方を執べし凡て清濁を書分たりといふ
べきにあらねど又その二変なる方を規矩として是を論ずべき事もあら
ざれども違例へば梅の花は必春咲くものなるを冬にいひ人も亦さう
いひて秋冬にも咲ける事ありこれは変之正にはあらねど然るに今誰其の
濁成せるを清濁の事も是れを此梅の秋の花を見て梅は
秋咲くものといはんがごとし又甚しく彼の行に代りて濁音の
仮字を用ゐたるは婆一つに限るべくして皆ぴぷぺにも清濁の所を
ハ濁音の毘夫倍煩と書る所あるべきにても見るに皆一つも見えて五音

の中に波の一声にて心に限りなく事湧成出らるゝにても、いと可笑しきことならずやかゞ。
なすに遂に都毘にもとらるゝ事も元より人はきかず中の音は一つなれば言語こそ
延ての音に限りなく眼は千尋にとゞかれど耳はそれに限りて聞こえかねて
ますらに耳は千尋にはわかるまじく上古の音をなぞらへいふことなれども幸に
仮字といふ物を作りては眼をもて之を知るべし 神眼の明る所は耳の聞所に及
はざるといへども上古の音を今耳に聞べき也然れど仮字にてまなびがたきを今の
術なりけり かくて音を得ることになりては仮字は清濁をわかち字音を論じ其比
例をしるすに委しく始て耳に聞に髣髴たりともいふべし三音考に委
しくいへるがごとし次第に仮字の事は清濁音を論じ其例をあげ是を論じ
べき例にあらねば仮字に今流布の仮字を従ひ給ふとしてそれに己が口舌を以て上
古の音を定めむとするは私の甚しきものにて口舌は役に立ぬとうつしてかく相

なれば準とすべきは今の世の口舌なれば定めがたし 神代の言も
神代の事を正しとせむとて丹波にても言の葉を正しとすべしとするいと
多かるいを正しとせし その中に今世中なるも言の葉を正しとせむ
然れどもこれ皆後に音便に頼まして言ひ誤ちもあるべきに已に神風の
事どもの言ひ習ひを正しとせむ御国の言ひ方ならめやなんど世の事もかの神代
ころの事にて音便に頼みまさる物なるをとなふるにも猶口舌に頼むべく
正不正を定むるは別ちて論ずるに訛あるをこたふるにもさることなれど
へば上古にかむさびたる言ひ衣冠正しく坐せるがごとく後世にくだりては
呼ぶは平服にて臥しるがごとし平服にして臥するは甚安佚にして心を
ゆるすものなれど正しとせむ稽古の人はつねに鳥帽子をもちて
すこしく下級の者までもほどよく身なりは上の衣を着てありつきたる

禄に訓ていさゝのこ窮屈にても忍ばざりなむその如くかむりぜと呼てもさ
のミロ舌の使行しくも忍ばざりなむ然今の新着これをいぶかしいの世
路に於てもかぶしむ力ある人の衣をも着せしていかんぞの平服なる
小のミ訓するが故にかくてその安佚なるをよしとらひて逐て文字挟
正しとは偏見に行しにしく何ぞさて悉曇家にうとむ中なるぶんの音
何かは是くて外國の音は有とても不正なれバ之余既に外國の音不正とはるゝ人
是いらぬに必べき事なればんと不正の音とせざる所以なくて其の音の不正なる
こと然きなるべし　古書さんの眼なきに古字なきより其之附たる式
余毛箇の字を假りて記し来まさといふを非とす此ん の音に當べき字なく
ばそれに近き音の字を假りて必ん之用ゆ假字とて訓に定めおくべきことなるに
何ぞの古書にもんの假字とて定まれる假字(いろ)いんて正しく其字の音のまゝに

用ひたるいともくかし多くは近き音然假名を延(エン)とえ袁(エン)遠(カン)とを
閑(ガイ)とけ登(トウ)とに用ゐるがぬし但しんの音あしバそれをも或は云(ウン)因(イン)など
の字を借りてんの假字に定めおくべきなりん然るにんの假字なきいろ字のな
き故にいろしバ古さてもと音なかりし故之日本紀などに一字を二音三音にも
兼用ひられた古事記の假字いかに(一字は)一音に定め用ひて二音三音に兼用ひさ
る例一つもなきは年そのこむとんとに兼用ゐべきなりけし記中假字二音
兼用の例なき此一つをもつても新説の説の非なることを知べし　上古の事悉く
に正しくして漢に造りなせるはみな何きにかし従といへるこれ勿論の
ことゝ余かつてにいふは後世の事は皆何しとおいて何し従さいて上古のまゝ
然後世とても従ふと思しまはいふ上古は上古に有りて従ふべき後世の
事は後世に従ひても何ぞ行しかるむ故に詩の曲に従ふとには後世んしる

呼辭にそのすゝんを用ひたるとやうにまた法則く定をとゝひはなつもとへし

又てんてんきかんの詞のんなどと古を論じたる所は決してむかしく

んには非ずとも今時は技の者承引するまじく然れども余もくもしくむとは

呼下の詞には古も今もと離常れしくてんとすんと唱之候りてくして上古と

論しく下にての世の癖ともろく例をもとぞべきにはあらぬしと存る也

六月八條

秋　武人にはいひいうえのとはあるまじきぬる思のあはいなえと位置とあつて

あるを踊りしと奥ともとていぬ思ぬの連ひと用ひていふべきをのうく

大かたあといひにはいひどとはあるをまくどは輕きて上さり又分けべく定云く

宣　先生尾張の名古屋の田中道麿といふ人已かおどの所属を改める

説をおもくとあちどころに明米の誤りを知りて大に感服していふくいぬ思ぬ

とそちこちなちこちとの連ひは何まだこれらは彼方の坊さんとて即吾が許に来りて門

人となりまたり道麿はこれらは坊なりしとて然らく解了せるものなり今猶

其のこれらは於つきく自ら難ひざらにはとん鈍しとやはなむいかにもあれ

は行や行ア行はりもありしく連ひあるはなしと連ふ言称らしもむりしさ

まらに帰りてかどの所属を難はばされとはれまつとはうると遂へぞや

にそと所属をとも難ふべきをや此かもはや行や行ア行連ふ例と和歌し然

もぶいぬ思ぬなどもはまりの乱をもむに何ゆゑはらむ又大いおかにをさむる

をはく音の轉ともいふも云ふてんてんとて言語の上の轉しての音の轉をは

別なる物ぞくしらにおあづしぬるとされは音の上は大にまく其に轉ぬれ

どもそれは五音の音の轉を知らくりし毎にくに見るさまきは物なれ共いはは

其轉さしたる綿は一をにも聞きは言きしきとへ又ふれあきともれとの。

やすきも音には稱呼は異なれ言の音には稱呼の異なるを知らしめんとこれらによ
て其この稱呼と音の稱呼とはおのづからぬことを係なるべしかくて
ゆゑ何は必ずかく稱へず何は必ずしもしかせぬは何の總て文字を既に字
音なるうつしに出でたるなし然れども穏かに定めかたからずや
さてなほのりて云はむは其本なるつぎに何とぞと言の本に係の如く思ひ
きこゆれたる精しうしてはあさぎの歌と何ごこの歌といへることをも能く何と
ご山とおさぎ山といへることも能くれば言の本に係る何にしてはこれにて愛
岩字なと通りし用ひるのうち名を地名の假字なりと係りと変
しこりまみつりでは難しなくのとせ

秋 何いうえどの位置を改めましる古事を云ふ益なく学
也武人のいぬゐぬ何ちこちなもちこちと然て問まつる聊辨あるか

何しく前の事くいへるりの、実には於表の所屬を殺らずして一と変と
不容成章の功ありかしばこれかたく右に音見の本と見りぬと自然の理
義なれば尾張人のものと害そのよりはかりて何しで理義のゆきかはぬも大ら
なに見るさんく添き害をなすまじきてこそ又ありさぎと何とこの制あるてそ兼
てぬものは御指べきことなきるもりかし

宣 尾張人の云ふといへる何事のもとなり唯のうし

古方九條

秋 所問の大をおかしと云ふにちち添へるは証例もなく稱ぎは抗載せぬべ
しかしのこは略云ふるを師の稱重をかくいうちまして治ひかしし一言語は
連声でほひて其くも稱くも治用ひるを一言の稱をといふは漢の字
ゆゑ似くの御本の云盡くはたえし

【宣】云彼は連声を論じたる言とも聞ゆも語聲などいふ事をいはゞ山川(ヤマカハ)谷川(タニガハ)を
どいふときは山谷は清く川は濁りて川舟川柳などいふ時は舟柳が濁りて
川は清し此類をいへるにや然らば再び聞えたるやうなれば連声ともいふべきものなれ
ども混連言を後に連声といへるは彼の類におもはるゝなるべきかつは知し

六十條

【秋】淡(アハ)と沫(アワ)と云こと

【宣】こゝろの説上古には清は口読にも何たゞ唱へて今のでうくは何でも唱へ
を何と清濁とも何也唱へて別なきは後世書紋の訛と見え今の世
にいひなれたるに泥みて古へを推(ス)へからず濁りて清とも古とも何也
唱へたらんには文字なりし代には沫と全く同言なるべければ仮字を定むる
所に何とより古には何ともいふ別(ワカ)つべきぞんぞく仮字の別何らいりとの其の

に別ありしを後に口読に別なりしむかしは何の由にかいとゞうつりしく仮字のみを
別つべき

六十一條

【秋】みなとこふあこのをとめごに迄よりつく言がしかく何のお魚の
をのこきおく魚とつきそせ給へりしむよく

【宣】此說の如くにては谷を合ちなく濁せをたゞ何とも云ば魚へる例あるを
ことおふをと通りしいへる例を何とするし

【秋】みなをとふのぶの言を引ばうの句まとするにかりて何のお即魚の
ぞとなるをよしへしあら

【宣】こゝは已の考へといはらく何ら但し上田氏はおをの所属旧說を用給ひ
それは旧說なれば即ち。どうなるでぶの言を引とはなにとも其の論也。

己か考へハ凡て上古の音ハ皆うつりひさるゆゑなれバぷをもく[illegible]ふ

ふうとなり或ハいけバぶうとなるをおへつくもバ即ふうなとなる

ぞいふぷうと音うる者あそう[illegible]なれバ

みるをこふ
みるそく
うつ（韻）
魚
ちかみ　臣

〇策うあ音ろて字音のまつらか　いへるもし

おくいへバるもつしくくぶくしき中するも九これ貝似の音調之化よも

似たり古歌なとに中をみしくをこしおかきみとうあらバおおおすりてごと

めくそごとりけバこぶおとなる底之

まがおかきみ　まごおかきみ（あいごの韻）

ちのめくなしの音をまごといへるハ下おおきみとつぎまる所も似たり

ころあくかよハ例ありし吾の松原の吾をおことすむハ誤これハ別に考へあり

秋　みるそくぐみるそこふの冠辞旧説あるをかなる者の考あをもみるそく

の解なし此同じやうてよろしとこれへし　又史の説も一つ用ふべし社友

村先生ハ異なる考へもあるべき説といへり

右十二條

多い唯の俗言

秋　家社友礒波今路頌日温花之容より一页談つ三及ぶ今路云此度の

海中かんの句ぶ韓せむとて無さるといふ俗言をめくいふはくハ史の

説色づくこうに究しうちふ似たりもえ来ん答ハ吐声の連声ぷ然ハ吸声の

連声と分別明らかなりとぞ熟く古書を考ふるに吐声吸声に雑俗と分ち

も吸声ハ古辞の雑なるにも仮りにもおいで即各にし名ある雑俗駁雑せるをも

みとめてよりさればこそ集の書に俗語とく[illegible]ありしかれバ和名

おのりめ下今のかに[illegible]てまる剣[illegible]て[illegible]知るべき之此例又天竺の中かハ南天

竺と北中と俗[illegible]おありて[illegible]ぷ[illegible]と[illegible]論ずべきか

なるに又ゆうむとゆんと呼とゆふと称しゆことは万するの声に三節とあり
んらうと呼ばむしろ訛もかといふかるはあまた縁明らる也規矩と為しく
しまく計しんの支絡あへしけれ

宜 余がさきにんの論に俗云の急らしといふて然おせるは後世の訛言の
傍例にあせるのこ称まで吐声吸声の清どもに及ばぬもとより人吐声吸声と呼て
雅俗と分つはむづかしんおも十音の中にうくぽつ等の十音は吸声にうつしぼやすし
吸声早しく俗なりし可哥の辞なとに此十音を避さるはいふに但し礪波氏が
今云しるはしりて急促るる次のこのてむくうくぽつ等にはまるうしけれ
おしなし御きも吐声吸声に雅俗と分つといへるはいざ何の證へるるや
さて此礪波氏が論の大らるはんの連声に拘する依に上古よりも急
促る連声は俗なる依に古人は称し紀まい俗云の急らさと叙てんの例にいれ

ざいしくいへることまた一つのこれはいれ誠実に似て是たこれは言で此二つの
間すてらしてんの弱きを急促音は殊に俗なりとしてんは俗なりざるがゆへに称き
諸の音の中へおしおしていふときは二つともに不正の俗音なりとも俗といへど水
中へ投の落人ざるをいふを中古との証るおいつかりとあちいふといへるにと
今の俗云おいづんずるだつつかりたいふ紀るに礪波氏の論のわくいふとも
づんずりいすなは雅言といふんの文の此唯と俗云おいゑうたいひるんざ
まうにそも急らさい俗としんざい雅しといふんとこれらまでも吐声推て吸声
俗しといふ論のならしぬにて成さてしるべしこれさとんば貪と町人をとしてへ
云るれは町人を賤しうしきもとも人のうへらを見るときは世に賤きがやし
如くと今砺波氏がんの音を俗しくしと思ふを町人の町人と賤しうしけ
と思ふがやしめ上古にさりのがもて其人のうへあり見れば其の世に賤しき

るとおもりのぞ

たいか十三條

秋

文云今たぱと讀む例ありてやをかうがむと讀むりといふも文説なりしと

いふべからべし先の言のかく目は千岁を度ともと耳はそふ従ふとあると

いざれば又菊花の理を究めて口耳に試むべき他に術なし彼唐の古書をと

むは一つくの文字なをたとてまに一つくの名を呼連ねくこれ古人の云しと

偏に心得るりのこいとしも奇也き術なりとし梓を彼を揃ふ出る

しともとこを示さんとも文字といふ外物を連ねて其活用を知るべな

まだ千岁の上千里のかといへ兄を文字とを見てく今の口唱へ今の耳に學

取る事の理會を得しされば其外物を見ても活用とかなるに術なくて

やた有へきあ御は音句を正まて之りこを音句を正さんとも又を音句の國にて

ある所をも知るは其を國て来る所を知らんとする人との喉舌牙齒唇

等の音のあるを喉舌牙齒唇等の活動を以て古今云處の精微を探んと

必法則によらされば又正しきを得べからんば唐云ば阿等の五音相揃て

三行を分生まと其即喉音と辨ぜん其一則にされば五音既ある三行をば

余の七行も因て来る所なるしんや必因て来る所あるべし歟其七行を

形さんには必ぱんの句形かるべくしんばぱんの句なきとは十行彼りしは其の

なるんばぱんの句なきとんは諸の舌音に陷音をなもて得るりも其道が齒舌の

理をも古云にぱんの声得るこしと察まる外にしかばぱんの句に一定の形なき

ことは印度支那共り其にかしるとも文齒舌の理を以て辨へ知るのと

宣

むと讀むりといふも讀句ともいへて牟武等の假字を以て説と

何を讀句といふことを知むられくの字むに於しばして何とうなる

むかしへて假字となるまで仕かに古人の意を知るべき術なし故ことに當然
理を窮めて己が口耳に試みて定めむは漢也宋儒の学にして皇朝古
学の意にも天地總備せり當然の理を何を準としてか定むべきそれぞ
己がんとりて寵むるなりし己がんを以て定むるいはゆる私の文にあらずや
いへる死物活用の論も大に違へること いふとよりもまづ活用なる
所は古語にて活用ある語に非ず言は死物の假字も文死物の假字を
まづ書紀とかけるれども其の死物の言文死物の假字とつしるく
古語を作るつる言に活用は何も活用は假字のいへるごとに
とれしりしも死物の假字を活用なる言は更につしるし古語の
活用を語るにあり於假字は死物なる所なくつとしも古語の活
用を物と知るとよりも活用なるときは更に活用とある上に何ぞ

ことへば日本紀の假字は一字を二言三言にも通用しうる所につる
は我古語の語に偏ぎるはまず通用と云ふのみにて活用とは異
なれども活用して更に古語を語るをこまで准へてさとるべしとへ
咬歯（カミ）といふ古語を加牟波と書きしを然るに此語者の説の如く口舌に試
連声の法を以て活用して牟をんとなみ波を半濁として加んぱ
ともかに通じて何る元分をさとるべし但し巫を加牟那岐とせし
例が如き牟をんとよまでは咬（スイ）水葱（ナギ）はなぎるべしとるかべからなれどもしれく
同音異義の古語はいと多き皆上下の語くまりて分為ば事まく假
字は活用を語りてあれしりしもれらを混ずべしといちぢくの神葵紙
なかのやき假字といふに活用しても分むとせる文人の匂なきとはむ十
行偽はこ比こそ此論は妬波氏みづからも口言に考へ試てはいへるが嗚悉曇

故に此邦の説多くあれば手柄有りといへど今ことごとくは見え侍らず
といふ悪雲家に此説有るもあれど御国の音は一音なるを多くあれば徴を得
ることの皇国は正音を論ずべきに非ず皇国の五十の正音ならばんの音有るを
耳に此音邪なしといへ共行ぞ音をなす一と得るといへども然し此論のやうなる音の
周て出る前を精くいへば五十音皆いささか鼻に触ることあるといふべし然
れども其の音は甚はいささかなるゆゑに聊り出る鼻音と言ふ又十
行の間にも音によりて清濁あるゆゑ鼻にふるることの多少のさだめもなる
べからねば其の音きよみ人たれば只いささかの音の触るるにんは全く鼻より出て
口に触るるにも不正の声なれば五十の音にいれず此不正の音など皆む説の
音ありて鼻にふれてもしるを知らぬ論となしをんの音といふ是れそは
さだいささかの觸（フレ）るのみにて其ほど聊り出る鼻声もなくすなはちんの音

もなければいかにぞや上古の言にんの音なりといふ論には猶るべきぞ帰人には
鼻もみてても鼻より出るんの声もすなはち人々皆具してあれば上
古の人とてもんの音もおのづから有りしことは何ぞ疑ひも無きた論は
口より出ずる物にてこそ行ま鼻より出るべき物ならは何しざるが故にんは論はは
用ひざりし皇国の音声を論ずる者には正しきことを知るべ
知べし然るに御国の不正なる音を例説として皇国の正しき音と論ずるは
何ぞや上古の論にはんの音なきにこれらは人の身にいへる論有ま
ども是を聊りていふ昔しき人衣の下に犢鼻褌（タフサギ）をもして聊りたると
云ふがごとし然るを御国人の音にんの音なきいふの論者を論じあやしき
聊りにし斯何にかくのごとくして今藤波氏のんの音を論じたるは論者の人
の身に必具すべき理なくして人毎にこれありと知るれば何ぞ見苦しきことなる

んとて證にもあらでよろしといはんがなし

第十四條

秋 又云詠たみるをこふの説は非にあらずて最稱るべし其ゆゑは彼哀の所
屬を改正せしむる切といふべし行一二代の例を取て時らばいふに
據しうまし今頓に用ひあらしは但し字音を取つらひに云里吉
吾く御音を用ゐて決して略しと説くるはいふべからず

宣 こゝまでしばらく吾ゆるして御音と定めしたるは精しかれども御音
とはきや ちや ちゃ き田 くゝなどの類の音といふかくの如き音は字音の
古云に一つもあることなし みなそこふあとのつぎきを家が説きなぶの音と
せく延へうおの二音を約ゑしたるものにして其を延べも約めもあるはいと後
其何ぞうちまぜて御音なりしん歟 やわわわは御音といへるは古音の元を

さしはむさき先にいへることを音をさしてさらに御音といふことあはれなれば廿一
行の音をも其所は直音に而に五十の中にあるく古云にも用ひられ今俗談にげ
とく其を何とさばは古云に吾家(ワガイヘ)を和岐閉(ワギヘ)といへるが如きは賀伊(カイ)を約めて
岐(ギ)となれば漢に約きは岐(ギ)の本は御音なれ岐(ギ)となしく御音といはずして其氏
和岐閉の岐の音につきてこそ本を説けれは賀伊は御音なる其紀ゆるうち
ありせく賀伊を御音といふべしは賀は吾(ワ)の賀にて伊(イ)は家(イヘ)の伊にてあ
より約まれるにて其を准へてみるぞこふおみれてきとも知るべし

第十五條

秋 又云詠たやちみしおこ大君(オホ)はワがおのがお約まりて おこ大君となる
と云ひは上のふウおの例にて同しかしてもとくれは空の古云を説ひいは
まづ法則備はらざるに似たり上のふウおは音韻出没の法あるたらむ

説と云べし下のごおおい連声合呼の法と云べし是即神風とかしむ。
くせとせらるゝぞし連声と云べき古例をあげ云べし法によりて不言仮の
音声といふ事もわがおほきみなるを吾期大君と書く他に我大王と
書る事も今のごとくごおほかと合呼と云べきを示せる古例にて上古より音声の
例と傳へたる明証なるをぞ文字仮借のるものから誘ずして而国たりける
人を平らかにして熟く己が云べきことを云ふ今此等音句の学術を云ふ際
世の古言と説むの志ありて古語に云はゞ書たる人も是は成が業をも及び
説及ぶ所なれば其可否を辨ふべきなりけれ依て彼人の言のまゝをとりて申出で
あらせまつるになりけし　花押

壹 云ふに余がまごおほきみといふを例にあげらるゝは其音を延べ縮むる格といふ
るものは何ぞ此仮の法と合呼の法との差にはかへりてぞかく此法と論せらるゝ

吾井の辨にもの云はしに当らぬ事にして此はいづまみても同じことなり礒波氏やからそれは
悉曇家韻学家の法を引出て論せらるゝ事に彼の法どもに泥み拘りては古言の
義を誤ることも多しおもひはかるべし　他に我大王と書ることも今のごとくご
おほかと合呼と云べきを示せる古例にてや此法のごとくは我大王とは必連声合呼の法にて
いづまとても皆まごおほきみと唱ふことにてあやまりしなり記の歌
るとふはみる和唱は意富岐美と云ふにて和期と書るは一つも無きをいかにとなり
たる連声合呼の法ぞ五十音の仮名不言仮など云ふくしげにいへることのあらざる
ことは此一つを以ても古き知の理を究めて定むといふが大なる私にて古事にある
かさることども云ふべく古法の理を以て定めらるゝといふかくのごとき事は遠の
ある物ぞかし礒波氏が説は和訓によりて和期と書るものも跡べくとぞ文字仮借
なるがらには誘ずして古風なるとかしことなからんまでもし必ずまごことと唱

おこたりてはたゞ古事記とよぶも又和朝とこそいふべけれごとくいふべき事ども、
かぜの賀ガといふべき但し此論者の説のやうく文字紙に書るがゆゑに彼此佐ガなど
賀ガとよむとも皇朝の様を察すべくこそ。ことにいふべき者が笑ふべし しくは
ナラの衣し紀称にはいはべくもなしさて彼に於てが大君ともいづ
きみともいへるは千年にてごとくいへる方を合呼の法といふべし此によるを
古法とすとしていづれとも此法のなくのみといふも私の強言なるとや
今ならば此音韻の学術を以て漢土の古音を説むの志ありしとやあなづりがたし
元て古言を解せむは皇国の悉曇及音韻家などの術をもてしかるべからず
口伝あることとしていまづ漢土とかかはりたる韻学の説同じきを旨とし実ある事を
の法をも同じき事どもいうてさも彼の実書の術を知べきもあるをもって大事の
事とならぬをは彼の術によりていふ又大なる事なるをしらざるに今娜波氏が上

件の論にはあらず事にあてあるをもてこそ彼術にあてゝ解せんとする術
なれども今かあなれど是なるものとこそ思ふべきにもあらず されど凡
此は彼にもの義同をもてきたすべきをしらしむるをもて法をもて解せんとする
ゆゑにかくのごとくなるは彼法術によらずしてあらん古言を注るのみなるべし 学
ばいいかし通ふべしなるを知しく余が此辨によりてしるべきにこそ関係せば幸
甚ゝ

天明七年正月　　宣長

右第十六條

［宣］ちきつてるゝせ給ひし往々笑解といふ書に宣長がかくいはせ給ふ駁
戎慨言を評せし論者の妙まさしき汚をなし畜道の学者のつね
いひおぐるこころざしのきたなれがはしかれかしとみづからしほて汚さぬ
あしざまにいふべき殊その深き意にかなふ事なき物しらずかなしく

いはゆるこころのほかにはあらぬ理どいは皇国の古言にはなかりけるをしりぬべし。

八月廿日

華扇めし

道長

○件の鉄解は上田秋成が作也

鉼狂人上田秋成評同辨

【秋】狂人鉼せしを古反其罪に伏せしむべしとおぼしく此鐵索を放ちへ
他日本心を得て再糺問せむもの欲今見を見るに思ひを代りて
其一二を陳せむとも誰かしくは己連索せしきむをとたん帝
くは義憤を誰と神武記に載せたる年数を不足論といふは識り

狂人の衝口ヲ發たる譫言に大古の事蹟の霊奇なる所謂る理を
窮むべき大凡天地間の事悉皆不可測ずしぬは如しくば心偏なりぬ
人なる大古の霊奇なる伝説窮ふべしなば天地の無窮なる大理を
さぬべしとも霊奇なる事蹟を伝ふる古伝にも西教を移ては大郷
うちと理に成程を稱ざと二名洲三子洲の記或は斬テ為ニ三段ト等
れありるは大八洲也八百万神五百箇磐石千頭百机八千矛神八重
垣八咫烏等の類をいふはみなべく多数の義にして語にて数多
きをいはしぬと此の歴の無量広大なるは今の人の示ね
あたるく数へつかしいめ事なやとあがる今も遠国の山中なる
淳庬朴野の民大古に方尊せしとや其人民等は剣と子孫
計し称て自称にも人うそくへなれは断とに利欲なし經は思。

慮ありて洩らしは能くする疾も患へしかば設まうけしくらく生を書るなり・
天年をもて終るまで生涯耕織の業に係て寒暑に時の移ゆを計ま
としも己かましと姿へつむる勤はまへりしば又大坂近く田舎にも
昔より寓居せし加納といふ里に一老嫗ありしが隣人ともに齢をいふ
年百十八歳に有まりといふ又一人は百十三歳に有まりといふ人
人は伝説のまゝにて己齢を問しくせされど自明のるにいく伝く
老嫗に問へば今は百歳を超ぬしんとたえり答へぬ是ておもすとも
村屋せし紡績怠る事もなきり往事を語るは凡そ七十年前の
事をもや二十歳ばかりなるとも我ぬれむるといふを云ふも
天年をまくもまもとき人のまさ法なくありましく大古の時一世
六十万歳とも経ぬるよくも年数をまなく委しく曲こに植をもて

姿へ語はむかしいふもやとてまさに世孫に至は日本紀に載て古き記には
載ざるとぞくまへば太古の伝説といふものも漏て撰ちる人への味にもし
せし事もまり或は私意を以て陶汰せし事もまりてや二記の伝説
異同少からば御定は疑ふへからばと云とも旧辞の体は何も何し
しかおは田當時も疑有てぞ国記焼亡の後に川嶋の皇子等に勅ま
て撰ちらまりしとかさぬるく稗田阿礼の口誦に古き記なれば稗史漏や
あり紀の浄人等ゝ撰せしもさりるなりし之様なく日本書紀成る神
代に一書の異同繁り拾ゝ文堠の古賤於逸事も旧有所遺患臣
不言恐ゝ絶テ無傳と云ふとも是と諸書の伝説同しからば此を
千歳の下にありて己具眼之して漫りに取捨せむて衆の疑念を生
ちしむる事は固きる紀ゝは伝ちる神に旧辞ちより御定古書の・

残簡後人足を補ひなす事間々殊勝の事も見ゆるハと仰ハ
諾しきき

宣 古事記に世々の天皇たちの御年数を記して或ハ一百三
十七歳或ハ一百六十八歳抔ともあるハ上古の伝へに御齢の数を
くはしく傳へたりといへることを疑はしといへども又人の伝へし
神武紀よりの年数ハ猶あまりくだくだしきよし疑へるとかの狂人ハ
古へに暗き故に年数も短くなしきとい疑ハしくてこれを甚窓也
なるを此をいへる不足論といへるハ蕃海の深きのゆへ波
わしらふしく古を知らざりし故なり己が心に餌ありしか
今上田氏いふを甚も長なるといひ疑ハしくてをかすもあり詳細なるを
疑ひて上古の傳へなどいふかとこれへるハ識る何るの論ハ古き

かゝる人まさなく當時(ソノカミ)も疑ひなくて是まてとしいへるより論の趣を
此取りかゝし実同なるを以て古伝説疑ハしとみやれく古傳の実説
ハ実説ハいづれなるむとも実の間を疑ふハ何ることを虚実説
ゆゑありて其事とする人を疑はず疑はしなるハ誹之れて伝説なり
実なることハ日出月入の内なれば當時のなる迄し実説ハ何る也
今の論に出せる加嶋の里の嫗が年の数にても又一百甲歳
といふが実歌百あまり歳といふが実ありの疑ハるべきにて始まれいつまで
かはるゝ事をあなかちに古を知らぬことハ知りまさに紀に古実説何るか
よりく百余歳なるをもおしとある疑ふべきよりいなりまするとぞや

右第一條

秋 日神の御光る四海万国を照しますといへるが此神の御伝説ハ此子

光華明彩照ニ徹於六合之内ニとも又閉天岩屋戸而刺許毎理坐也尓・
高天原皆暗亦葦原中國悉闇因此而常夜往なとこれら六合ハ天地四
方の義なれバ此ちハ形體ハ内を繞りたる如く四海萬國の義ニ[illegible]られバ
思ひなハ葦原中國悉ク暗といふにて知られ之いかで萬國のこなたにて
天地間の天邦を悉く照臨ましますとハいへる傳説何ぞ此書ニ記りや
又思ふに古画ハおのづから三千年来此小録ニ[illegible]画ニ[illegible]てし[illegible]れバ
さし置べし此画図といふ物ハ事理才覚なども浩らでもとを[illegible]
まいを写しぬまた物の色も法制の上古史皇妹媒の該ハいかにしても[illegible]
唐ぬ以来ハ彩色なども巧なるならを[illegible]號を求むるまでを真物を描
寫ろくて写生の古さハ疎く成りしより皇國の畫図ハこまで流ニ[illegible]近世
いまにして云ふしれバ枝葉之今も一字を画せぬ因なきらる物ととらし

就中本大臣を麁とるすまい卯て上古の遺風ある物之ふ何乱它
国の西図いまもすとよく見ゆるうとて先く未説の大小なる低寸を什り
尺を度り道を造浮沉暗光を詳く美醜のいちりるるもれし写生
を事とせれバ何ふ展観の望なき物之此出の人性貪利萬出ニ
超ゆれ大世界九内を操の到らむ限ハ往廻りて交易を事とし終覺り
游通の便ニ図せし地球の図といふ物を閲るに文字以て度理の
西あふ出ハ其外(ワツカ)ゆくを除ハ出界なさん唯知られぬが多く此も地形
廣大なるが見らるまり此図中にいでや吾皇國ハ何方(イヅコ)の[illegible]とも見
あらいもまたバしつて必ずるき池の面に丙らずる一葉と落しけ
つるかき小島なりなりを[illegible]出の人を対し[illegible]小島すて[illegible]
邦ての先にを剏開(ヒラケ)られ大世界を臨照ま海に日國ハこふ小現ぎ・

まして西土も周く方邪悪く吾国の恩光を被らぬはあらず。
貢を奉て朝し来りし故に其一国も云ふに被せぬのことなし
行ふとなし神いふとも云ふ富せんなからんの太古の伝説と似たる也
されば此をいかなる伝説は吾国のもあるべく此の日月は吾国の太古に
現りましいやまをいきと云争んと作の裁断して事は皇尊
の常天竺は是始仏身の光明に世界を照したることを壇に室底吉祥の二菩
薩に令して日月を造らしむといへり 漢土は盤古氏の両眼日月と成まり
又又地皇氏の世定三辰分畫夜ともいへり 彼文字の無くは西土にも拾への
霊異なる伝説ありて他国のものは不可皆しかし此土の人も大人のやくかく太古
の霊奇なる伝説を云ひふることは信し難くんぞ語りかへき言と廣めるく
他土非物を論ひ馭戎慨言は撃つも取舎の眼あるへき書也書典はいつ

まことに一土一天地のみく他土の及ぶ所にあらず諺にいふ縁者の証拠にも立つにあらず
偽しきことを云ふ吾郷に増徳行業といふ人有りて太古の霊奇を論
ずる者ありて甚くいへるは今識りて唖男唖女を配偶せしめて其人
境に住せしめしに出生の児のいかに生立しむと見んとや太古の人物行方彷
彿とせんとするなん余又戯に云今大人と漢土西竺の土いづれにも生ぜし
事を三国の事論と策学せしめんとて他の此説いかならんや見と言えん西
盍 日神之所事を論しする例の漢意によらるる所あれども
辨を論るよりされど彼れはさてはいふに此大の神天地内の萬邪と悪く
悪しのふといへる伝説いづれの書にあるとかいへるにはいふべき書紀よ
照徹六合とあるとは姑く当土のことに備りてといへりと説曲ゆるを
又日神を中にて漢字をはいふまじせん探覚とも依りに任なりけると説曲ん

とはあり書紀一書に使照臨天地といへるはいかんぞかゝる唐天竺までの
天地は皇国の天地と別なるにや又一書に日月既生次生蛭児云々と見え
いふに日神月神といへるも猶日月にいへるを称へいはれたるにて
日月といへるもいふかよふなる様也猶多し神代紀をよく見よ但し
唐天竺の日月は皇国の日月とは別ことなるにやいぶかしくなむ
一點の瑕なきの至らに備まて神典乃旨はいと明かなるものと此一點の
黒雲に障へられまて大きなる光と見まするとも云はさるはいともくやしむ
べきなることありて葦原中国悉暗といへるによくよく六合と
四海万国の義にいへれば能く新たにいへるかの国本にその主となる
所といはれし諸はおのつから包括るにも其例多ししば證とすべく
さしとすれば京又冨士菌といへりて江戸と云はしめて出しおきたるか或は天
下一同ならず風聞はまれ御かまで江戸に居る。近代の方ならば京の主人の
許にいひおこせる師の其の所也たとへば風聞一同かはりし怪しき居中
一人も知らずと居師はといへると見て一人がいひし居中一人も知らずとも
あきらは江戸をおしなべて中国とといふにて又一人がいましくいやしく但しども江戸
もあらんかは江戸中とすとて去くべきに居中とあるは江戸はいづこもの
居なりけん中なるといへる所説はつまびらかならんそのうへ天下も葦原中国
も暗しといへるかしは異本に隠りてといへるは日なれは隠れてもありし日にあ
らばは隠りたる方行をくらきてありけんさて既に日あるらしは唐天竺の
日も別にはあらざれども暗くなし行ぞ疑ふむ但し唐天竺の
日月は別なるや　西の論はさらに何の用ひなる又阿蘭陀の人物の論も
用なきことさらく万国の為と見ゆるとも知つかしかにこそありし

いへるをきゝしり此図今時行り見ざる者あらん歟又皇国のいとも
廣大ならぬるもこれを知しさらん人は其昇美悪は形の大小に
よらぬにあらん枚類の大石も方寸の珠玉に及ばず牛馬は大なれとも
人に及ばざるがごとくいかほど廣大なる国にても下国は下国也狭くても上国は
上国なり万国の図をいふに小国と見るに南極の下方に何々ありて荒
の国あり草木も生せず人物もなし其廣大なる事は大かた地球の
三分の一に居るほど之定めて上国にはあらぬと四海中の最上の国とし
思へ得るべし抑皇国は四海万国之元本宗主たる国にして幅員の
しも廣大なるべきなるは二柱の大御神乃生成（ウミナシ）たまへる所に従ふて正し
かるべき深理のあることなるべし其理をすてゝ凡人の小智をもて思ふ
測り識るべきことならぬなれはあらぬ文例の不可測に託てもいふべし

まことに不可測なることは不可測といひて何とかいふても不可測とよびて
測りいたしむることは小智をもて浮きの辟之まへを不可測の理とて
さしおきつゝ現に目に見てあることなれども皇国の事には強て其非を
いふらしまづ皇統の不易なる所をもて始め申すは万人
の食とするの稲穀の美しきまても我国といふ天地懸隔せしことなるへきを
き事なども以下に言はんとするは又境域は廣大なれども以へた神代より
まて外国に犯されをかれることの无の世祖の威力なくも皇国へ
うりかつひに犯されずあるまへの異国の隣国のはあるにおやまされたびよ
併呑せらるゝが如き比類あるは一事とてもあるも不可測の理なるく
存せることとなしひろ為べし又けつかうの国なれは論の我の中
かをは殷富の国なる者らされども皇国に比すれば様ねとも皇国

彼は地こそは境域はこよなく小狭なれ田地甚多くして人民の
多きこと彼土にくらぶ所にあらず彼土ハ広大なれども
其中に悪しき山沢曠野多くして皇国に比ぶれば田地甚少なく
人民甚稀なり然れバさハおのれが土地の大小のみをほこりて皇国を
評し侮れるは大に誤なりかし大なる戸口稠密にして殷富隆盛なる事
宇内に於て皇国に及ぶ国あることなしこれをもて考へても又
一つの不可測の理あることを知るべし然るに世々の人ども只
ひとへに漢籍にのみ惑ひて皇国のかくの如く優れたることを
えしらず今上田氏も又これが旧轍を踏みてこれを知ることなく
徒らに唐流の糟粕をなめてかゝる縞事(ニガゴト)をや 太古の伝
説を甚しくこれを以て外国の伝説は正しくして或ひは附会を訛で

て伝へ或は妄に偽造して愚民を欺くものゝ漢字の通せざる国々の
伝説をも大臣記録に載すべしや此道の西の西なる教(敦)天主教の如き
皆偽造の説を信ずるに足らず皇国の古伝説は神の御口より出たる如く
凡其実の正伝なれば今日世界人間の始め二神一つ神代の始に符合
して始まるさまを見るべし何ぞ上田氏しらず外国の雑伝説を信じて
いひおとしめらるの妙説をえ信しとするは一頭の愚説なり漢書に見える
が如き悪云の雑ざる種々の種説をきさらに馬の耳に風なる
べし然れども今一つの考へを述べて是を正しきとするべし京極
黄門の小倉山荘百枚の色紙是は天下に一首一枚づゝ有れども数多き
故に今もその一枚を得たる人の伝へて其中に真の古伝説を
一つある人もあらず皆いかなる偽物の類ひにならん上田氏の今の論は

皆そこと瑞物なりと云て十枚なからし傳ぜざりければこれ瑞物
なるものを細てあげざむりきざりしかしこきわかるれも信ぜざりきや中よ
一枚はなりからば其物のかたちもそえとしくしく大つけりに皆一つか
思へらいかにやをさむ思さしらとおふ物かくくその事を見給ひてまへば
えらせはしくしたらば瑞に験われまたるものとかしこきかいひるのせる物と
そは何のしるしきことあらん一枚の其物とよりくえらくそと信せむ
すてかしこきにはかしまかくいそぎし国氏丈いたむ事とをも中に必
一枚は其物ありとて十人の物主ある人皆極れはいわく石りば傳来の
二つしきなまくもとはふひとつて家物くるとて其家物主といふもよいづまとりて
志とは実先むといふへしも文書傳とみづから見定むるときもあるとをさる所
の頼ひみずからく浮きれるまぼろしらと清く信ひ去く渇りなき純一の

古学の眼を見きてみるには神代の吾古傳説の妙趣ありて其実の物なるをも
おのづから知ぬ心かなまくかの九枚の瑞物といふかぎりも高き所にまねる
べし其域にいたりなば此其物とりの瑞物もとよりぎ何にいへるもみづから
知しらるべき物ぞや　さるは世の人を考古の霊奇なる傳説を
ふるに信じ居らんぞ直に信べきをいへるも文なまさしらんふまて実に
信ぜべきものとえらきする事ども此云のやくふくは信じ居るにはらしも
しらく信ぜるなかしても居るえらまこそ深く人の信の為なるべし実に信ずべくは
天地も一枚なれば此世の人のこと殊らん萬国の人にある信まるべきこと然らと
いふ此世の人をといへることも実まは信じ居るれなば信ずるなはしく
居るをいふぬいりえいかでかそと思ひしといふらむ

右第二條

秋 左衽右衽いつれを宜とし否とし定むへき事にあらんといふ論

万国ミな左衽なるらんに一国のミ右衽なるへきはさらにいはれなし万国を
経歴しらく右衽の国多くは何ゆゑある事なり一国のミ右衽なると見れど
きて此漢籍何れにもあらしといふに皇国を万国の上に置むとせば
禅了彼智術を取て己ある大をなすまでに漢土の夷と誹謗せらるゝに至
なるへし日本魂と云も偏するときは漢籍ニ三にあらし 儒仏の二教を土地に
ふさはしく培養せる故生育せへらん既に切支丹の如禁厳なれは
を見つへし二教の神孫の外人にかゝりせねはゞ即国土に相応しき
たいふへし之を論するは大理なる人の小智に批判すへきにあらじ今や
二教は羽翼とて用ひさせぬとも国は神の恩ませ給はねどもされば
今日まて根をも生して事物ゆゝみる自然の理を運轉せし所ともを難

に新へ言を止むへきにあらしか擬古は学ひらるへし復古は学者の
贅言之然りとも天地の無窮なる間にハ自然の運轉にて古に
後る所と云ましきにあらねハ釋氏の一劫は智術の切なれハ從ひる
し今日の弊風これつきることく一民の努力にはいかにも及ひかたし吾
師いへらく往昔は往昔にして通し今の世は今の世にして通す
此言旨味あるなり

宣 われ万国を経歴して右衽の国多くは何ゆゑとか見えはいはゆる紛
論己既にありとかり右衽の国も何ゆゑにかあらはいかに云ひ縦た然も
いいかもあきに皇国さへしといへるといひかみえくも論せるをそれや御国
の右衽何の家元の始なりけん知るへし 一国のこと別に左衽なる異
もしなけれはといへるは万国のいまは己往年のくはしう故の始く謬人

の大経にほころふるにつきてハ聖之教にも私ありし弟子皆左経なるも
のハこれを聖とぞしの翁といふにあらずといふことぞ　こゝにをいて
皇国を万国のうへに置むとするおもふにハ余がことゝ反覆せり
余ハ皇国の万国のうへにたちることを世人の知ざることを憾むると
上田氏ハ皇国の万国のうへにたゝむことを憂ふとぞかくに余が
言を破せんとなれハ是非もなきことに儒仏の二教を古此にぬき
いはハ言を世に世人の諸も皆いふとおもふまでもの所以なるをしらざる
ものゝ物の序するハ必ず正しき理なる所に従ふて
なるきるもの序するハ禍津日神の御心よりし序するとして神ぞ
悪事せらるゝ所なるといふて世に盗賊のなすもあり火の災のごとき
も禍ある神の御心ませるのみにやあらて天下の乱るゝ

下ゆるも神のわざ也ゆりぬ所とぞいふも　事物皆自然に従
て運轉と遂に勢に對して止むべきなりといふこといふ余が
いふよりなるにて頭を組し自然の運轉といふハ非之運轉ハ神のまゝ
の所を言ふ之称世の中の万のことハおのく神の御心より出る事の
所をいはずとても人力もてなきてハ止むべきにあら
ず所なれバきとハ皆止るとおもふハ誤なりといふを云ふ悪邪正を
わきまへて惑ハじとおもふて学問ハいはざる

右第三條

[秋] 清濁のこと　古言ハ精巌なると混淆して云ハ後世の俗解にて
や大凡物をいふに違目もなに論の多寡此方ハ最も粗にして精
巌なるハ文字を渡りて来る言なり假借の法之君の人作なれバ語て

往合ニよるによりていふにも精厳之清之濁之哥よりの主意へ
本く清は必清濁は必濁との心をわすれじと云也

〔壹〕清濁の精厳なるは文字東渡以後に清之とは云しきなりしより
以前の精厳なりし故に後に仮字を用ふるも精厳を定めらるなり
りしより以前の清濁の精厳なることをいふべし今世の俗語に
よしと祖父母をば濁りてぢゞばゞといひ父母をば清てちゝはゝと云ふ
類はしるや此清濁相違の仮字の清をとゞてなへしるぞ今しの
清濁乱のこ哭といへるもさらに混じたる事しられより精厳
なるにありしるや是に准へて上古の理も知りぬるべし　清濁や
よりの連声あることは連声によりて清濁の変ずるをいふて
精厳なりしまゝ濁とせるあや連声によりて変ずるとも文精厳なる

変ぜるは変し変せざるは変ぜずしてさらに混濁せることなし

太古四條

〔秋〕すべて古語は時代の風によりて争ひがたきものなるに
古人の格言伝はへし此所彼の哥は今に残り来りし古人の
うるはしく麗艶なる姿なきにはあらねど只格調もまた世の風俗にあらねど
依て見る日本紀に竟宴の哥にて仁徳天皇を頌ひまつる探題なる
べしと論せしるものあり又見につきても競ふべき者あり素盞乃
八雲立豊玉姫の赤玉は火に出見のおきつる神武天皇の芦原の歌
小庭伊須気余理姫の佐井川又畝火山等の歌の後の万葉集中
なるものは多へき格調なくてはいでくまじる清見原藤原京比
まではその風姿なるへくやと師は云しかば大息須臾ありて想ひおこせ

何らる事昔日も議論せしが決てまにはいかゞともされ云々決然と論し
けるにこそ人每にも打出てと笑はらるゝしなき大人もこゝまでも
不可測と記して論なかるべし但是ば時代格調の論定て常
ひがごとといはれまじきや大古の伝説実同のほかにこそれこそのみも
而社友も疑ふもしてさて此のこと

[壹] 二行に載せる上古の歌ども の中にはやゝ後の調とおぼしきがあるを
いふ事は萬葉集も既にいはれしなりされば上田氏の晩といへる人
藤原宇万侯 も更に得るべし御意ならば今云へば翁のいはれしを語る
いやまさりしてありける大方近来古学家の古歌とて入るゝ
ことわり又つゞいて曽の解しもして耳を遠きとは古しとして耳ごなかく
かしこき事しるに何のいふるとは後人と定むべき見るが下しえれて

詞も其つゞけざまも古へと後と大にかはれるを見れば又いさゝかもかはら
ぬもあるにつきて證見る須まつなどいふ詞は神代も中古も
今の俗語までも同じことにてかはりあることなきは此ゆゑ古今の詞
とも准へて云ふべし されば上古の歌に耳たゞしき詞多く一三の詞
つきもまじりあるに時のさまは此等の證見る須まつの類なきも多く
後世とかはれるもののさまにて多く後世とかはれるものなれどもなべて
古調にかへしてよしといふべし万葉集の同じ時代の歌にも詞
つゞきのいかにも耳に近きもあり又これ等は後世の格と全くかは
らぬもとりまじりて見えて上古の歌をも准へ知べし時代
の風調は詞の耳にちかきと遠きとにかゝるものにはあらず
そなはれる姿のすがたの味をみづからかゝるに會得すべし

云にかゝはりていへる事は、神かゝりしぞ強ることにて詞のうへにつきて。
上古の意をとられても、能く其味を知らざるが故也、今上田氏は
外京夜京宮の了簡の深きなし軽くいつはりなる論にある處の如く
のみなれば、口つきにては上古の意の時代見さへもしたなしと
あやつりし、これまでも不可測に託してゑぬしき人しらぬ
かゝる不可測も事にてそれ于漢人は天地萬物の理を悉く
測り識るべく測らるゝことといふてはいはゆる事と今上
田氏も又て漢意なる故に余が不可測といふを訛るのならしとし

右第五條

秋 天竺漢土三韓其餘の國々もみな少彦名神の所事も始め
みつるものとしておかれし也といへど一層眼をとゞむべし、これは強見なるや

きし人有とも今一層眼をとゞむべし、さる所にかゝはりしは余がいふ
所は余が詳へさる冨士の言葉の誨にあらしめんとすれば却て
尋常の人情と都を旨めし化を漢にも高ぶらぬ眼あること
いへどいかん此神なと出世させて渡るといふを聞こえるとしてかくいふ
なるべけれど、古の事蹟の中にも此説は殊に荒誕なる論とも
べきにあらねど、常世國といふは他にあるべく國名とも知らぬ所なれば
いつ國神なる説も他國を早しむるは何して却て称辞の意に
あなれば之一國なるに何らぬとして此神大地内のあらゆる種類
くまゝく万事と創業しつる中にいふは漢說もて抗ふべからず
大名持神と力をあはせんと一かくも此小洲の内さへ他國に行ふせた
りて他に去ませしとや粟茎に縁て弾かれわたる種の矮小なる一神をたゞ

廣大なる国〻に万事を創業し給ひむとしてもいかにぞやなどいへるも
かゝる人なる小智の害ある論にしてや云ひけるが万国に悉く創業せ
しといふ傳説あるをやゝ云ふに知るべきくは壮老世に揺るのちを本固としてく
思慮妄想の念他より我の老婆心と異なりしは天孫降臨以来百八十
万歳の傳説なるにそれをも続めたる代の神を本同じくして杳の淺ける
伏羲より尭舜よりかけてはいへるに云ふにもと諸に淺くせりしてもいへる
るを云ひ譚呼とも云しに彼土にてても一聖主とも崇称すべき由にけるとせりしく
いひてやみるべき事に君にて前に言ふあるそれに任る者の心をも見志
らぬなかりなく人錯誤りしに似ていふべし大人の著述を取て戒慨
云も何も他事な唯ゆゑなりかくこての漢籍に泥みし者のるを
み説示すべき用ひさすれど国内の梟鉄狸の全軀を咲ふの識ハ事た

なるじをや中〻もされど言をとりて彼土云ふの弊とぞ申すべきに
安かるは狂人反て己が罪に伏せば刑具を採て土狗いふ所言をも
せざりしが禍津日の狂言にましてそもて神直毘大直毘の
御霊をば違ふべくなかりしに悩むべし祷むべし

一 秋錆狂人といふ事を請ていと見づる所有りにきりし
あのが思ふに急きへるとなるとも知らつねるつらいるへられど
なやしうかくなる事に病ふなるがかへるていられさく
なむ　さみし世のかる座の人のかるつかうつの見る所とあ
そひやせむ　いせん人も世に志なる程も有いいせん人に忠なら
むものぞ

[亘] 今一層眼をとゞくしくみよ云ともいへるはいふといふ花いかに

狂人の説を斥くべき論までこそあらめいかでか余を斥けらるゝに
いふはいかなるいふに彼ノ狂人の世人の眼をおどろかすといへるをこそ己ノ
辨に今一層高くしてみんとはいへるなれ眼をおどろかしたるはいへるに
本彼が上て余はおよばざるとや　おのれを又一層といへるは児童の
わらひをまねたり彼をいひて己も又今一層高くして
みんといへるものを　此一派の説又まへの漢意の見にして先づ
らしからぬ粟がらに蹴られて海を陸とし和漢の人の学風を経学
し詩歌などいふ奇異の説を古見の人々侮れるを学と信せん
とするは子曰とよむ人ねの書生は皆よく辨じいふことなり
和学を今上田氏なつかしげに正しく論しするはいかにぞや
いとあさましく彼奇異なるふうにて信せさるは例の漢意ながく

凡人の小智を以て古神の妙業を測らむとするはおろかなり　これらの事
既に葛花にも鉗狂人の始めにも委くいへれば今ここにはいはず
おほかた漢意の去らざる人にも論をなしうべし　所謂少名毘古那
神等の経営の跡なるはそれとさしたる傳説のなきことなればしられぬに
決して然りといふにはあらず　さればこそ古学の眼を以て見よといひ
又始めに誤へるをもとむるぞこれはいへるなれ　此文のことをよく見よ
己は古学の眼を以て見れば己に知らるゝ古学は信せさる人はこれを
信せざらんよりも論ずべきにあらずや　此事は古事記傳に近考
しく委くいへり　信せん人は信ぜよ　信せざらん人の信をさする文
何事もなからん　常世国といふは他国を早しむるにはあらで
却て稀辨を空思ふは常世の文字に惑へる説と笑ふべし

杳(ハルカ)の後なる伏羲堯舜にかけていへるは人ゐがらしきは文いと心ゐ
がらし伏羲堯舜るどいふ者も此神よりなるか後なる家に
あれは此神よりおこりつらむといへるか何よりなる文か書くと学者
のよくよりしくいふといへるとこがれてもんぬぞを然さにてよくし
くいふといへるのなかくこをてらしくいへるこもと難しけるあもなくさ
故と修家にながむるには文か書くは彼国とく雪日と崇むべき由なる
王ども形迹はなしくいはまるむはよりの人情のうへきことを
とやらかいへるは識にさぐることを故に余ををらしくいふとのろ
しらぬ談でも内らに今上田氏のなりしくいをてやかなる人まう
これ人情とやらかいへるは人ゐをいふらるれは然ものまといきやかに
皆かり自然天下経営ましくなる所の所まと然の法器被す

荒蕩とやいふに就いかなる人情なりやなまさかしらんまかなとも荒
蕩とやいふかもせよ正しき古典に載て傳り来る正説と皇
国の人としてくいひおもんへまてらいかく人もも皇国の古へとる
きらしいひおさんとくくく人のこれと称奥するとさへに惑めくもくい
ひ破らむとするにこれも文りの狂人の徒とやいふむけなしに
汚みされの媚る唐の人のなく改者にてとは所謂下る学者も文
伴勢人は皇国に忠けり他こない国に忠けりとこふりの所為にそ人を
誹破せ所を悩しあいいせん人なたるまんりのときいへるはいせ人皇
国たる称せるい大なるれたる称しるく形るまる夛きと告とも
といふも諫ぞれは忠とといふなりんかくいふはなさ国につくろいへる
みて実ならきんにいあるに何とる形迹見出もして余にこら語

くじりんとまう物に長人のこゝろみをかゝむる広に富と拒る
ともひとく書のかうにある書虫といふおとせるを多くしくあがむその
狂人のこゝろをなすものいたくかりまもへまでも

上件上田氏か論ハひろく広の害となる物なれはいさゝか
これを辯し給て見む人ハかるゝをいと好むところなりそ

清見あく道ハまゐけて　難波人
かしかる物と見えかるゝ見えや　宣長

上田秋成ハ大坂の人也

寛政九とせといふとしの霜月廿日うつし終りぬ茂花の直紀

難